

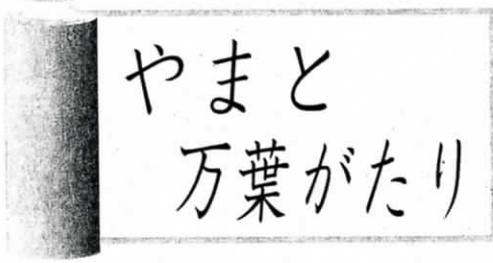
幣帛を奈良より出でて 水蓼 穂積に至り 鳥網張る
坂手を過ぎ 石走る 神南備山に 朝宮に 仕へ奉りて

吉野へと入り坐す見れば 古思ほゆ

作者未詳(巻十三・三三三〇)

この歌は、奈良から飛鳥を経て吉野へと向かう道行きを、多くの地名を織り込んで詠んだ長歌で、元正天皇もしくは聖武天皇が平城宮から吉野離宮へ行幸した際の歌と推定されます。「朝宮に仕へ奉り」とあることから、道中で一泊して翌朝に祭事を行ったことがわかり、その場所は「神南備山」のある飛鳥と考えられています。

奈良から飛鳥を経て吉野を目指すには、大和吉野(奈良盆地)を真つすくに南下します。古代には大和吉野を南北に縦走する直線道路が三本並行して存在し、西から順に下ツ道・中ツ道・上ツ道と呼ばれていました。この歌の一行もこの三道のいずれかを通過したと考えられますが、それを知る手がかりとなるのは、歌に詠まれた



「穂積」「坂手」という地名です。穂積は現在の天理市前裁町の一帯に当たり、前裁町の西辺には中ツ道の後身である県道51号が通ります。坂手は現在の田原本町坂手の一帯に当たり、下ツ道と中ツ道に挟まれています。古代に坂手と呼ばれた地域はさらに東南に広がっていたらしく、中

「訳】神への捧げ物を並べる奈良を出て、水蓼の穂に出る穂積に到り、鳥をとる網を坂に張る坂手を過ぎ、川が石走り流れる神南備の山に、朝の宮としてお仕え申して、吉野へとお入りになるのを見ると、昔のことが思われる。

詣した際にもこの辺りで宿泊しており、中ツ道の休憩地点であったことが知られます。一方、坂手は龍田(三郷町付近)と海柘榴市(桜井市金屋一帯)を結ぶ古道(保津・阪手道)が中ツ道と交差する衢に当たります。つまりこの二つの地名は、ともに中ツ道の重要な中間地点を示していると考えられるのです。

原(天理市東井戸堂町・西井戸堂町一帯)に当り、平安時代に藤原(県立万葉文化館主任 研究員・竹内亮) 次回回は15日

遠音にも 君が嘆くと 聞きつれば

哭のみし泣かゆ あひ思ふわれは

大伴家持(巻十九・四二二五)

この歌は、大伴家持

が750(天平勝宝2)

年5月27日(現在の暦

で7月9日)に「南

右大臣家藤原二郎」へ

贈った歌です。

「南右大臣家」とは、

藤原不比等の四人の子

を祖とする南家・北家

・式家・京家のうちの南

家を指します。「藤原二

郎」とは藤原南家の第

二子の意味とみられ、

『続日本紀』によれば当

時の右大臣は武智麻呂

の子の豊成であり、豊

成の第二子といえは継

縄です。しかし、この歌

の相手は家持の「智」と

も記されていることか

ら、継縄とは言い難い

と指摘されています。

また、豊成の弟である

仲麻呂(恵美押勝)の子

・久須麻呂であれば、家

持の娘に求婚したこと

やまと
万葉がたり

で知られますが(巻四・

七八六〇七九二)、「南

右大臣家藤原二郎」と

称することには疑問が

持たれています。

『万葉集』には、「智」

が母親を亡くしたこと

を知り、家持がこの歌

を詠んで見舞ったとあ

ります。このとき家持

は、越中国(現在の富

山県)の長官として当

地に赴任中でした。

「智」は平城京にいた

と考えられ、越中国か

ら平城京へ、書簡のか

たちで送られた歌だっ

たのではないかといわ

れています。

「挽歌」と題された長

反歌の中の一詩であ

り、長歌(巻十九・四

の呪力があるとされ、

【訳】遠い便りにもあなたが嘆いていると聞いたので、

しきりに泣かれてしまいます。同じ思いを抱く私は、

未だ新型コロナウイルス

ルスも終息しない中、

このたびの豪雨で被害

に遭われた皆様に、お

悔やみとお見舞いを申

し上げます。

(県立万葉文化館指導

研究員・井上さやか)

次回回は29日

宮中警護の際にはその

弦を爪ではじいて鳴ら

したといえます。「智」

はこれらの歌をどんな

気持ちで受け取ったの

でしょうか。彼の返信

は残されていません。

隠ひそりのみ 居をればいぶせみ

慰なぐさむと 出で立ち聞けば

来きた鳴く蝸かまじ

(大伴家持 巻八・一四七九)

今年は例年より梅雨明けが遅いようですが、明日香では先日からセミが鳴き始め、梅雨明けが近いことを感じさせてくれました。日中はニイニイゼミやアブラゼミ、夕暮れ時にはヒグラシの鳴き声が響いてきます。ヒグラシといえは夏の終わりに鳴く印象でしたが、夏のはじめから鳴くセミだと、いうことを知りました。

この歌は「大伴家持の晩蟬の歌」と題された一首で、「晩蟬」とはヒグラシを指すとみられます。中国詩の影響を受けた極めて特殊な語であり、家持の教養の高さがうかがえます。中国詩では特に秋の弱々しいセミが表現

やまと
万葉がたり

されることが多く、セミの鳴き声は騒音と解されていたともいわれます。一方、万葉歌では鳴き声が愛でられました。この歌の本文には「日晩」と記されており、日暮れに聞こえてくる哀調を帯びたヒグラシの鳴き声をほうふつさせます。

この歌では、心を慰めるために家の外に

一步出たらヒグラシが来て鳴いたとあるだけで、結局心が慰められたかどうかは示されていません。しかし、家持は同じような状況を何度も歌に詠んでおり、紅葉や春の花やウグイスを見ることを心の慰めとした

【訳】隠ってばかりいるとうつつとうしいので心を慰めようと、外に立って聞くと飛び来きたって鳴く蝸よ。

暗いニュースのストレスが蓄積し、コロナ鬱と呼ばれる症状も生まれてしまいました。窓を開けて外の空気を吸い、この歌のように外界の事象に心を向けることができれば、少しは慰められるのかもしれない。独り居て静かにものを考える時間が、心を育む時間となることをお祈りしています。

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、(県立万葉文化館指導 研究員・井上さやか) 次回8月26日